

十九世紀スコットランドにおけるトマス・リード

岡本 慎平

十八世紀スコットランドの哲学者トマス・リード (1710-1796) は、デカルトからヒュームに至る近代哲学者が抱いていた「観念説」を批判し、哲学は我々の常識 (common sense) の転覆を目的とするのではなく、我々の常識を擁護し説明することを目的とすべきだと主張した哲学者として知られている。そして「哲学は常識に従うべし」という彼の哲学方法論はその後の多くの哲学者に受容され、やがて「常識学派¹」と称される思想潮流を作り出した。

ところが、一時はあのヒュームを凌ぐ評判を得ていたはずのリードは、十九世紀後半にイギリスの、いやヨーロッパの哲学史から忽然と姿を消してしまう。もちろん、「常識」を試金石とするリードの哲学方法論は、「常識の擁護」を標榜した G・E・ムアを経てオースティンらの日常言語学派に受け継がれ、現代に至るまで大きな影響を保ち続けている。しかしながらリードの哲学そのものに再び陽の目が当たり、再評価がなされるようになったのは、ここ数十年のことだろう。

ほぼ一世紀の間ヨーロッパの哲学者の間でその名を轟かせたリードが一旦歴史から姿を消したのはなぜなのか。その謎を解き明かすには、彼自身が生きた時代ではなく、その名声の転機となった十九世紀中盤のスコットランドの哲学事情に目を向ける必要がある。そのため本稿では、リードが生きて思索を重ねた十八世紀ではなく、十九世紀スコットランドの哲学者たちの間でリードがどのような評価を受け、そしてどのような命運をたどったのかを見ていきたい。

本稿は以下のような構成になっている。第一に、リードの哲学の基本的立場を確認する。第二に、リードの愛弟子デュガルド・スチュワートと、その影響を受けた十九世紀の「常識学派」とされるトマス・ブラウンやウィリアム・ハミルトンが、リードをどのように理解し、どのように評価していたのかを明らかにする。第三に、十九世紀の哲学者 J・F・フェリアーをリード評価の最大の

転換点とみなして、フェリアーのリード批判とフェリアー自身の哲学的立場を確認する。そして最後に、十九世紀以降に残り続けた「常識」の変遷について概観する。

1. トマス・リードと「常識哲学」

トマス・リードは、今日では十八世紀の哲学史における重要人物として知られており、同時代におけるデイヴィッド・ヒュームの最大の批判者としてその哲学に対する評価も大に行われている。しかしかつては、他の著名なイギリス哲学の「正典」であるロックやバークリやヒュームに比べると、知的源泉とされることもなく、知名度そのものについても、彼らと大きく距離を開けられた状況にあった。例えば2004年に公刊されたケンブリッジ・コンパニオンのトマス・リードの巻の序文は、編者によるこのような嘆きから始まっている。

歴史は気まぐれに判断を下すことがある。合衆国、グレートブリテン、そしてフランスで彼の死後ほぼ百年にわたり多大な人気を博した後、トマス・リードは哲学の正典から消え去った。²

だが、リードが正典の座から転がり落ち、その著作が直接読まれることが少なくなったということは、二十世紀以降の哲学における彼の影響が消滅したことを意味しない。おそらくその潜在的な影響力では、リードは決してロックやヒュームに見劣りするものではない。実際、ケンブリッジ・コンパニオンの編者たちが嘆いていたのは、今日でも「リード的な主題と方法が、ムア的な「日常言語」哲学に明白に見いだされる³」にもかかわらず、リードに対する関心が失われて久しいということだった。

「歴史から消え去る」までの百年間、すなわち十八世紀後半から十九世紀中盤にかけて、リードはイギリス、フランス、アメリカの哲学界で、そして潜在的にはドイツでも多大な影響を及ぼし、頻繁に言及されていた。また十八世紀イギリスの社会思想史という側面に目を向けても、彼は経済学や政治学を科学として確立しようとした「スコットランド啓蒙」の牽引役だった。しかし、そう

した「啓蒙」の時代が終わった十九世紀において、哲学者たちがリードをどのように捉え、どのように受け入れていたのかは未だ不明瞭なままである。なぜリードは「主要な哲学者」とみなされなくなったのか。

十九世紀スコットランドの哲学を考察するために、まずはリードの基本的な立場——そして十九世紀の「常識学派」の底流となった立場——がどのようなものだったのかを確認しておきたい。リードの主要著作は『心の哲学』(1764年)、『人間知的能力試論』(1785年)、『人間活動的能力試論』(1788年)である。生前公刊されたリードの著作はこの三点だけであり、そして十九世紀の哲学者たちが目にすることが出来たリードの著作も、この三点に限られる。

リードの哲学の基本方針には、ロックやヒュームに対する批判というネガティブな側面と、常識原理の提示というポジティブな側面がある。まず前者から見ていこう。リードの哲学を貫く反ヒューム的な立場の中心にあるのは「観念説 (doctrine of ideas)」に対する批判である。言い換えれば、リードが強く反対していたのは、我々が何かを知覚する際、その知覚は外的世界を写しとったものであり、そこから生じる観念は実際に世界を表しているのだという見解である。とりわけ『心の哲学』は直接的にヒュームの『人間本性論』への反論を意図して執筆されており、ロックやヒュームに対する対抗意識はその献辞でも明確に打ち出されている。

1739年に『人間本性論』が公刊されるまでは、一般に受容されている人間知性の原理を疑問視することなど思ってもみませんでした。あの論考の独創的な著者は、ロックがたてた諸々の原理にもとづいて懐疑主義の体系を打ち立てました。もっともロック自身は懐疑主義者ではありませんでしたが、……さて、あの著者の推理は私には適正なものと思われました。したがって私にとって、その推理がもとづく原理を疑問視するか、それともその結論を容認するか、そのいずれかを選ぶ必要があったのです。⁴

ここに見られるように、リードはヒュームが『人間本性論』で展開した「外的世界の懐疑」について、その論証そのものは妥当であると認めつつも、その結論はとうてい受け入れられるものではないと考えた。そこでリードが選んだ方

針は、ヒュームの「推理がもつづく原理を疑問視する」ことにより、議論の前提を覆すことだった。

リードは『心の哲学』において、概ね次のような主張を行った。ヒュームは「人間の科学 (science of man)」の確立を標榜しながらも、実際にはきわめて疑わしい仮説に基づいて知覚作用を分析しており、それゆえに人間の心の働きを正しく理解することが出来ていない——だからこそ、妥当な推論を行いながらも、結果として受け入れがたい懐疑主義に陥ったのだと。リードによれば、ヒュームがそこで念頭に置いていた「仮説」とは、「知覚する心の中にあるもの以外は何も知覚されない、我々は外的な事物を本当には知覚せず、そうした事物が心に刻印した像や映像しか知覚しない」というものである。この仮説に基づいて推論を重ねた結果、行き着く結論は次のようなものとなる。

私の心の中に印象や観念が存在すると想定し、右の仮説が真実であるとしてみましょう。すると、それらの存在から何か他のものの存在を推論することは出来なくなります。印象と観念のほかには、私に知られるなり概念があるなりするものはないからです。さらに、それらは瞬く間に過ぎゆく儚い存在ですので、それらが存在出来るのは、私がそれらを意識しているあいだけだということになります。⁵

だが、こうした心の理解は我々の常識から著しく乖離しており、受け入れがたいものである。こうしてリードは、ヒュームは誤った仮説から出発してしまい、我々の推論能力を過信するあまり、我々の実際の意識とはまったく異なる見解に至ってしまったと主張する。そしてさらに、推論や理性の力を過信して容認出来ない立場に至った哲学者はヒュームだけではなく、バークリやロック、さらにはデカルトまでも含まれる。

リードの考えでは、ヒュームのような外的世界の存在に対する懐疑が生じることは、近代哲学の誤った前提が生み出す自然な帰結である。言い換えれば、彼は、デカルト以降の哲学者が念頭に置いていた「観念説 (doctrine of ideas)」という仮説こそ、外的世界の存在に対する懐疑が生じた要因であると考えた。リードの見立てによれば、デカルトにせよマルブランシュにせよロックにせよ、

近代の主要な哲学者は共通して、我々の知識の正当な根拠を我々の心のうちに、より限定すれば我々が抱く「観念」に見出そうとしていた。そしてその哲学の中心問題は、我々が直接知りうる内的な感覚や観念に基づきながら、いかにしてその「外側」にある、心から独立した存在を認めることが出来るのかという議論に向けられていた。リードはこのような、「観念」を媒介としなければ外的世界についての知識は得られないとする議論一般を「デカルト的体系 (Cartesian System)」と呼び、それに対する全面对決の姿勢を打ち出す。

デカルト、マルブランシュ、ロックは物質的世界の存在を証明するためにその才能と技量を発揮したが、結果はひどくぶざまだった。……しかし哲学者たちは俗人たちの信じやすさをあわれみ、理性にもとづくもの以外は信じまいと決意する。万人が理由を上げられずに信じてきた事柄について、彼らは俗人たちにその理由を与えるために哲学に取り組む。……ことが重大なだけに、人はきっと、その証明は難しくないと思うだろう。しかしこの証明はとても難しいことなのである。というのも、これら三人の偉人は誠意の限りをつくしたが、推理出来る人に外的世界の事物の存在を確信させる論拠のひとつすら、哲学の財宝から引き出せなかったからである。⁶

心の内側にある根拠だけからは、心の外側にある世界に関する命題を論証することは出来ない。これが、リードが「観念説」を批判した理由である。

リードの基本的主張のポジティブな側面は、そうした観念説に代わる信念の根拠として、我々の「常識」に着目した点にある。リードによれば、哲学の目的は思索によって我々の直観的な判断を覆すことではなく、むしろ我々が日々の暮らしの中で依拠している一定の原理を明らかにするための「精神の解剖学」である。「観念」のみからいかにして外的世界の实在についての信念が獲得されるのかを考えるのではなく、そうした仮説に囚われず、我々が物体を知覚する際に実際に心の内側で働いている作用を解明することが、彼が「精神の解剖学」としての哲学に与えた使命だった。そしてそのためには、知覚作用の複雑さを真摯に受け止め、その心的活動において暗黙の前提となっている複数かつ多様な「常識」を見出すことこそが重要だった。例えば、リードは『心の哲学』で

次のように述べている。

もし我々が本性上信じ、特に日常生活では理由も挙げられずに当然視しなければならない諸々の原理があるとすれば、それらはいわゆる「常識の原理」である。そしてそれらに明らかに反することはいわゆる「不合理」である。⁷

また、後の『人間知的能力試論』でも、同様の意見をより詳細なアナロジーを用いて表明している。

我々は哲学の全歴史の中で、自らの感覚を信じないがために火や水の中に入り込んだことのある懐疑派を決して読んだことがない。あるいは他の人々が持っている感覚よりも自らの感覚を信じないということを、自らの人生の行動で示した懐疑派を決して読んだことがない。このことは我々に、次のように理解する根拠を与えてくれる。哲学は、人々が自らの感覚のうちに抱く自然的信念を決して征服することが出来なかったのだと。そしてこの信念に反する難渋な推理は、決して彼らを説得出来なかったのだと。⁸

このようにリードの考えでは、我々は日常的な生活の中で決して疑いえない前提をいくつも抱えている。そして、そのことを意識的に信じていても信じていなくても、いずれにせよ我々の思考の背後には常にそうした「常識」が存在する。そして、常識を拒絶した場合には、哲学の理論そのものが受け入れられないものとなる。したがって、

常識と哲学がこのように一方的に競い合うと、哲学はいつも面目を失い敗北する。それどころか、哲学はこうした敵対関係がやみ、侵略行為が放棄され、親密な友好関係が回復するまでは栄えることが出来ない。というのも、実際常識は哲学を何とも思わず、その援助を必要としないからである。他方、哲学は常識の原理のほかに（別の比喻を用いれば）根を持たない。哲学は常識の原理から成長し、そこから養分をとる。この根から

引き抜かれると哲学の評判はおとろえ、その活力は枯れ、哲学は死んで腐敗する。⁹

このようにして、常識は哲学理論にとってある種の試金石という役割を担うことになる。

しかし、そうした「常識」が何を指すのかは曖昧である。たとえば『人間的能力試論』において、リードは実に様々な常識の「第一」原理を挙げている。「私が意識している全てのものは実在する」、「私が明白に思い出すことの出来ることは実際に起こったことである」、「我々が自分の感覚によって明白に知覚出来るものや、それらがあるのだと我々が知覚するものは、実際に存在する¹⁰」。これらはすべて、我々が日々の生活の中で決して疑わずに信じている「常識」であり、こうした「常識」なしには、我々は日常生活を送ることすら出来なくなってしまう。リードは最終的に、次のような対比をおこなうことで古き哲学体系と新しい——そして誤った——哲学体系の違いを明確化した。

古い体系は常識のすべての原理を、証明を要求することなく第一原理として認めていたので、その推理はあいまいで類比的で難解だったが、その基礎は広く懐疑主義の傾向はなかった。我々は、アリストテレス学派が物質的世界の存在を証明する責務を引き受けようとしたようには見えない。しかし、デカルト的体系にもとづいた著述家たちはみなこれを試みた。¹¹

こうしてリードは、「デカルト的体系」の「観念説」は我々の常識に合致しない結論を導き出すがゆえに不適切な仮説であり、それ以前の「アリストテレス学派」はそうした困難から無縁であった、と結論付ける。

まとめよう。リードは外的世界に対する懐疑という問題を回避するために、印象と観念に基づく知覚の説明を退け、それを誤った仮説であると論じた。彼の考えでは、哲学が常識を吟味するのではなく、その反対に、常識が哲学理論の妥当性の試金石となるのである。

2. 十九世紀の常識学派

リードは『心の哲学』を執筆した後、アダム・スミスの後任としてグラスゴー大学に転任し（1781年）、その後1785年に『人間知的能力試論』を、そして1788年に『人間活動能力試論』を公刊した。この二つの大著は認識論と実践哲学の双方で、『心の哲学』において素描された常識原理に基づく知性の分析を詳細に推し進めたものであり、この成功によりスコットランドにおけるリードの名声は確固たるものとなった。しかしグラスゴー大学での晩年の活動の最大の成果は、おそらくデュガルド・スチュワート（1753-1828）との出会いである。スチュワートはリードの講義の聴講生の一人であり、リードとの間に「師弟というより共同研究者といってもよい間柄」を築いて強い絆で結ばれた相手だった。そして彼は後にエディンバラ大学の数学教授——後に道徳哲学教授になり、単に狭義の哲学だけではなく、「数学、天文学、倫理学、心の哲学、今日我々が心理学と呼ぶもの、経済学、政治科学、法学、文献学、美学、文芸批評¹²⁾」に至るまで、非常に幅広い分野で成果を上げた。

スチュワートは、我々の心は「印象と観念」の単純な法則によって理解するものではないというリードの基本的な枠組みを受け継ぎ、我々の信念には推論による正当化抜きに含意されている多様な「第一原理」が含まれることを認める多元論的な立場をリードと共有していた。しかし、スチュワートは師であるリードが繰り返し強調した「常識 (common sense)」という言葉を、曖昧でミスリーディングなものとして嫌い、「人間の信念の基本法則 (the fundamental laws of human belief)」という言葉を用いた。

スチュワートがリードの常識原理を——スチュワート自身は「常識」という言葉を嫌ったが——擁護して、人間の心理の複雑性を認めながら幅広い道徳科学の研究を行ったのに対して、スチュワートの弟子であり、その後任の道徳教授となったトマス・ブラウン（1778-1820）は、スチュワートの問題意識をそのまま引き継いだわけではない。というのも、ブラウンは前任者のスチュワートが構築した大学の教育プログラムに大部分従っていたものの、その内容を大きく変更し、その講義では「経済学や政治学のような社会的主題、つまり道徳哲学教授としての責任は大部分消え去り、倫理学が心の哲学の主題の一つとして

扱われた¹³」からである。またブラウンはリードのヒューム批判には重大な欠陥があると考え、リードとヒュームの統合を目指そうと試みた。確かに「ブラウンの思想は、外的世界の实在や因果性についての信念など、特定の信念は第一のものであり、還元不可能な直観であるという見解を常識学派の先駆者と共有していた¹⁴」という点で、リードやスチュワートと同じ見解を抱いていたとみなすことも出来る。しかしながらブラウンは、リードのヒューム批判に対して疑義を公言し、ヒュームの「印象と観念」による心の分析の正しさを認め、観念連合心理学を有力な理論として捉えていた。いわば、ブラウンはリードのネガティブな主張を拒絶し、ポジティブな主張を受け入れたとすることが出来る。たとえば同じくスチュワートの弟子だったジェームズ・マッキントッシュは、ブラウンが1812年に次のように述べていたということを書き記している。

リードは、我々は外的世界を信じなければならないと怒鳴り散らした。だが彼はそこで、我々は自分の信念に理由を与えることが出来ると小声で付け加えた。ヒュームは、我々はそうした観念を支える理由を与えることが出来ないと叫んだ。そして小声で、我々はその観念を取り除くことが出来ないと囁いた。¹⁵

こうしたブラウンの主張によれば、リードは我々の日常的な信念に暗黙のうちに含まれている常識に照らし合わせることで、外的世界の实在についての信念を疑いなく認めることが出来ると主張している。しかし、我々の外的世界についての信念は実際には触覚によって、とりわけ物体と触れた際に生じる筋肉の反発の感覚によって生み出されるのであり、何の観念の媒介もなく我々が抱くものではない。言い換えれば、ブラウンは常識原理ではなく感覚に目を向けることによって「外的世界の存在」についての信念が獲得されると考え、「五感が一緒になれば、とりわけ触覚という感覚は、外的世界が実在するという信念を生み出すに十分である¹⁶」と認めたのである。

ところが、しばしばリードとヒュームの和解を試みたと考えられたブラウンは1820年に、スチュワートから教授職を引き継いでわずか十年足らずで急死した。これにより、リードからスチュワート、スチュワートからブラウンへと引

き継がれた師弟の鎖は断ち切られた。だが、当時すでに常識哲学はスコットランドの哲学の「主流 (dominant)」となっており、その教えを受けたウィリアム・ハミルトン (1788-1856) によって、リードの哲学はさらなる注目を集めるようになる。

ハミルトンが当代一の形而上学者とみなされる要因となったのは、「無制約者の哲学 (the Philosophy of the Unconditioned)」という論文である。この論文は、フランスの哲学者ヴィクトル・クーザンへの反論として、一切の限定が存在しない「無限」などの概念をどのように理解するべきかという問題を扱ったものであり、ハミルトンの博学さを世に知らしめたものである。ただし、この論文にリードの名が登場することはただの一度もない。その代わりに、この論文で中心的な役割を果たす哲学者はカントを始めとしたドイツの哲学者たちである。例えばハミルトンは、「絶対者」について説明を加える中で、当時はまだ十分に知られていなかったドイツの哲学者たちを次のように紹介している。

カントは古い形而上学を殲滅したが、論破した相手以上の幻のような絶対者についての学説の萌芽が、彼自身の哲学の胸の奥に仕舞われてしまった。彼は〔絶対者の〕身体を殺めたが、絶対者の幽霊を追い出すことは出来なかった。そしてこの幽霊は現在に至るまでのドイツの諸学派に化け出続けている。哲学者は彼らの形而上学を捨て去ることに、哲学を現象の観察に限定することに、そしてそうした現象を法則へと一般化することに、甘んじたりしなかった。バウテルウェックの、(初期の著作の) バルディリの、ラインホルトの、フィヒテの、シェリングの、ヘーゲルの、そしてその他諸々の哲学者の理論は、非常に多くの努力を費やし、能力の多寡はあれ、絶対者を肯定的なものとして知識に適合させようとしている。しかし絶対者は常に否定的なものとして、ダナオスの筈に入った水のように、虚無の奈落へと走り去っていったのである。¹⁷

こうしてハミルトンはこの論文で、カント、フィヒテ、シェリングらの著作に幅広く引用・言及し、ドイツの哲学を英語圏に紹介する役割を果たした。こうした点から、例えばブローディはハミルトンを「新たなドイツ哲学に熱中した

最初の哲学者だった¹⁸」と評している。

ハミルトンはこの論文で名声を得たが、リードとの関連で言えば、ブラウンのリード解釈を批判した「知覚の哲学」など、様々な論文でリードの解釈を行っている。だが彼の最も重要な業績は、多くの注釈と補論を付して『トマス・リード著作集』を編纂・刊行したことである。そしてその注釈において、ハミルトンは「リードのアイデアとカント的な哲学を同化」しようと試み、「心の第一原理」などのリード的な観念を、自分自身の形而上学を打ち立てる出発点としたとされる。

ハミルトンはリードやスチュワートにおける「常識 (common sense)」を、たとえば講義録では、「*voûç* や *intellect*¹⁹」とほぼ同義のものであると述べている。ハミルトンの解釈では、リード的な「常識」は、カント的な「アプリアリ」²⁰として読み替えられる。こうして、ハミルトンはリードとカントの総合を試みたにもかかわらず、その挑戦は失敗に終わり、ハミルトンが付した「注釈」は、リード自身の考えとは異なったものになった²⁰。そして、そうしたハミルトンの「失敗」を真っ先に指摘し、カントを受け入れるためにリードを持ち上げる必要はないと主張したのが、ハミルトンの親しい友人でもあったJ・F・フェリアーである。

3. フェリアーの常識哲学批判

J・F・フェリアーはハミルトンと同様、プロイセンに遊学することによって同時代のドイツ哲学を受容しようと試みた哲学者である。しかし、ハミルトンとフェリアーで大きく異なる点がある。それは、プロイセンに遊学した時期の違いである。

ハミルトンがプロイセンに赴いたのは、1817年と1820年であり、そこで彼はカントやシェリングに注目した。それゆえ、ハミルトンはカントを大きく取り上げ、それをリードの常識哲学と結びつけようと試みたのだった。それに対し、フェリアーがドイツに留学していたのは1834年であり、その時ドイツでは既にヘーゲルが没し(1831年)、ヘーゲル的な「観念論」が全盛を迎えていた時期である。言い換えれば、十九世紀初頭のドイツの哲学は刻一刻と様変わり

しており、そしてその異なった状況がハミルトンとフェリアーのそれぞれに異なる思想をもたらした。そうしたフェリアーは、キープによれば「ポスト・ヘーゲル的なイギリス観念論者の最初の一人」であるとともに、「スコットランド常識学派と啓蒙哲学一般を拒絶することにより自身の絶対的観念論の体系を発展させた²¹⁾」という点で、十九世紀のスコットランドにおける重要なターニングポイントを作り出した哲学者である。

フェリアーのリードに対する立場がとりわけ明瞭に示されている著作は、「リードと常識哲学」という論文と『形而上学概説』という著書である。「リードと常識哲学」は、リードの問題点を指摘することにより、フェリアー自身がその後を示している哲学体系を暗示するという点で、彼の代表的な著作といってもよいものである。さてフェリアーは、ハミルトンの『リード著作集』と、そこに現れていたリードの哲学に論評を加えた。だがフェリアーはハミルトンらとは異なり、リードの哲学を賞賛するどころか、徹底的に批判的な目でそれを評したのである。むしろフェリアーは、リード自身のテキストにではなく、ハミルトンの脚注にこそ見るべきものがあると考えた。

リード博士が哲学者として非常に高い地位にあるというわけではないが、彼の著作のこの比類なき版は、彼の欠点を埋め合わせ、彼の著作を非常に魅力的で有益な研究である編集上の注釈と結びつけることになっている。ある著書の卓越の多くを、本文著者の非常な不完全さから引き出すことはありえる。リードがより学識ある人物だったなら、彼はその編者の類まれなる学識を得ることは出来なかつただろう。より明晰で親しみやすい思想家だったなら、サー・ウィリアム・ハミルトンの力強い論理と思索の鋭さは、おそらくそれを示すためにはもっと狭い領域でしか見られなかつただろう。全体として、われわれはリードがもっと博識であるとか、明敏であるということを望むことは出来ない。²²⁾

この書評からも分かる通り、フェリアーはハミルトン版リード著作集について二つの点を認めている。一つは、リード自身（本文著者）の哲学は不明瞭であり、誤解に満ちたものであること。そしてもう一つは、編者であるハミルトン

はリードから最良のものを取り出すことに成功していることである。このことから、フェリアーは少なくともリードではなく、ハミルトンがリードに付け加えたものにこそ真理が含まれていると考えていたことが分かる。

フェリアーによれば、人間の精神についての研究には形而上学と心理学という二つの全く異なるアプローチが存在する。形而上学は、われわれの観念や心の働きそのものに目を向けるのに対して、心理学は外的世界の存在をまず認め、その外的世界とわれわれの観念の対応関係を研究するアプローチである。そして、フェリアーは、真の哲学は前者であり、後者は哲学的な態度ではないと主張する。もちろん、ここまではリードのヒューム批判と近似している。しかしここでリードとフェリアーが大きく異なるのは、フェリアーはリードもまた心理学的アプローチに陥ってしまっていると主張したことである。

フェリアーによれば、人間の心に対する哲学的な研究は、決して「我々が実際に何を考えているのか」を明らかにする解剖学であってはならない。ところが、この解剖学的な態度はリードの哲学的研究の中心でもある。このような研究は、確かに我々が知っていると考えているものを明らかにするかもしれない。しかし、その心の働きがなぜそうなっているのかについて説明が与えられない以上、常識にはある一定の信頼しか置くことが出来ない。この批判の根底には、哲学は必然的真理に基づかなければならず、曖昧な知覚に基づくものではないとするフェリアー自身の立場がある。例えば『形而上学概説』において、フェリアーは「認識論 (epistemology)」という言葉の世界で初めて作り出した。しかし、この「認識論」という言葉が導入された目的は、形而上学は「何が正しいことであり、何が正しくないことなのか」を峻別する理論に基づかなければならないという確信からであった。フェリアーは認識論という分野を定義する際に、次のように述べている。

この分野の学問に固有の名を付けるとすれば認識論 (epistemology) である——ちょうど存在論 (ontology) が、存在することの学説ないし理論であるように、これは知ることの学説ないし理論である (λόγος τῆς ἐπιστήμης —— 真なる知の学)。認識論は「知ることとは何であり、知られたものとは何なのか？」——端的に言えば、「知識とは何なのか」という一般的な問いに応

える学問である。この学問が十全に明示化されるまでは、存在論には到達出来ない、いや検討すら出来ない。よって、これらは我々の学問の二大部門である。「何を知りうるのか」を確証するまで——換言すれば、徹底的で体系的な認識論の全ての詳細を討究しつくすまで、我々は「何が存在するのか」を明らかにすることは出来ない——換言すれば、存在論に足を踏み入れることは出来ない。²³

フェリアーは、リードはこうした態度とはまったく正反対の立場を承認していたと非難している。というのも、リードが「常識原理」を掲げる際、彼はなぜその原理が正しいのかをまったく検討しておらず、単に「我々はそう考えている」と現状を追認しているに過ぎないからである。

とはいえ、フェリアーは常識原理を認めなかったわけではない。むしろ、常識原理が我々の思考の底に横たわっていることを積極的に認めようともしている。例えば、フェリアーはリードが「観念説」と呼び拒絶しようとしたものは、適切に言えば「表象主義」であると述べ、それをリードと同じように拒絶した。しかしフェリアーが容認出来なかったのは、リードがそうした表象主義を拒絶しようとしているにもかかわらず、実際には表象主義を暗黙のうちに前提してしまっていることだった。フェリアーによれば、外的世界についての懐疑が生じる要因は、観念を媒介としてのみ外的世界を知ることが出来るという想定ではなく、実際には、我々の心の「内」と「外」を区別しようとする想定にある。そしてリードの常識原理による知覚の説明では、我々は常識によって心の「外側」にあるものを知ることが出来るという枠組みになっている。これは結局のところ、われわれの知覚作用を「心的、すなわち主体 (mental, or subject) 」に属する部分と「物的、すなわち対象 (material, or object) 」に属する部分に腑分けする作業に他ならない。たとえ観念による媒介がなく、対象を直接知ることが出来ると想定したとしても（少なくともフェリアーはリードの知覚理論をいわゆる「直接実在論」だと想定していた²⁴）、心の外側にあるものを内側に写しとるという想定がある以上、「リードは、表象説を退けたとは到底言えず、彼自身が表象主義者だったということが、その必然的な帰結となる²⁵」。それゆえ、結局リードも内と外の区別を抱えてしまうため、外界に対する懐疑を回避する

ことが出来ないとフェリアーは論じる。それに対し、フェリアーが想定する「心と世界」の真の関係は、より観念論的なものだった。

4. 観念論の台頭と常識哲学の帰趨

以上まとめると、十八世紀末から十九世紀中盤にかけてスコットランド常識学派に含まれることの多いスチュワート、ブラウン、ハミルトンの「常識の原理」に対する態度は、実際にはそれぞれ多様であることが分かる。スチュワートは我々の信念に含まれる暗黙の前提が多々あるということを認めつつ、それを「常識」と呼ぶことは憚った。ブラウンもまた常識の原理を認めつつ、リードが拒絶しようとした「観念の道」を積極的に受け入れようとした。ハミルトンは一度廃れた「常識の原理」を復活させつつも、そこでの「常識」はリードが想定していた「誰もが従っている原則」というよりも、むしろ哲学的理論における様々な自明の「原理」を指すものとして用いようとした。

その一方で、フェリアーは「常識の原理」を自明なものとして追認するリードの姿勢に批判の目を向け、哲学は常識を追認するものではなく、むしろ意識の体系的な形式を詳述するものでなければならないと考えた。こうしたスチュワートからフェリアーに至る十九世紀の流行の変化は、いずれも多かれ少なかれリードに対する立場の違いとして理解することが出来るかもしれない。だが、フェリアー以降、リードの存在感が希薄になったスコットランドでは、大きく分けて二つの潮流が生じることになった。

一つは、カントやヘーゲルといったドイツ哲学の研究が次第にさかんになったことである。例えば、「十九世紀の後半3分の1から二十世紀最初の3分の1にかけて、ロバート・アダムソンやアンドリュウ・セスから……エドワード・ケアードとノーマン・ケンブ・スミスを含め、ハーバート・ジェームズ・ペイトンに至る偉大な学者や哲学者²⁶」が、スコットランドにおいてカント研究に従事することになった。これにより、スコットランドは英語圏におけるカント研究の中心地となった。かつてハミルトンはリードを通じてカントを読み解こうとし、フェリアーはドイツ観念論の洗礼を受けることでリード批判を行ったが、ここに至ってリードという媒介者なしに、カントの哲学が研究されるよう

になった。いわばハミルトンによって、「イギリスの思想の伝統的サークルが破壊され、それによりあらたなアイデアがもたらされた²⁷⁾」のである。これは、十九世紀スコットランドの常識学派の活動の一つの帰結だと言えるだろう。

もう一つは、観念論の復活である。パークリに対する賛辞を公言したフェリアーだけでなく、例えばハミルトンの後任である A・C・フレーザーはパークリの研究書を公刊し、また自らパークリの著作集を編纂した。フェリアーに始まる観念論に対する関心の高まりは、やがてイギリス全体へと広がり「イギリス観念論」と呼ばれる大きな潮流を作り出した。これもまた、十九世紀スコットランド常識学派の活動の帰結である。

もちろん、スチュワートからフェリアーに至る全てを「常識学派」という括りで理解することはもはや不可能であるかもしれない。デュガルド・スチュワートは、リードの人間本性の複雑さという立場を受け継いだものの、それを「常識」と呼ぶことを避け、政治学や経済学という「道徳科学」を打ち立てるための「人間の信念の基本法則」という造語を好んだ。ブラウンは、リードのヒューム批判に対する反論を公言し、観念連合心理学による知覚の分析を容認した。ハミルトンは、その博学によりリードよりもドイツ哲学の本格的受容の契機となった人物であり、フェリアーは「常識」に基づく「人間の科学」を単なる臆見の追認とみなし、パークリやヘーゲルを賞賛してイギリス観念論への道を切り開いた。彼らはいずれも、何らかの点でリードに対する修正や改定を行い続け、そして最終的にリードの影響はドイツ哲学と観念論によって——そしてその両者は時として重なる形で——駆逐されていったのだと言える。

以上のことから、次のように結論付けてよいだろう。リードは歴史から突如として消え去ったのではなく、その死後から弟子たちにより、徐々に修正と批判が繰り返されたことで、さらにはカントやヘーゲルといったドイツ哲学が知的源泉として紹介されることにより、その座を追われていったのだと。しかし、こうしたリードに対する段階的な関心の低下、そしてブラッドリーらの「イギリス観念論」への反動として生じた二十世紀の哲学では、「リード的な主題」は再び息を吹き返す。典型的には G・E・ムアの「常識の擁護」に「リード的主题」の復活を見ることが出来る。しかし、ムアの著作にリードの名が現れることはほとんどない。そして、ムア以降、もはや曖昧な「常識」という言葉は避

けられ、推論を経ないまま我々が抱く「直観」を試金石にするという形で、「リードの主題」は後のオースティンらの日常言語学派にも²⁸、ロデリック・チザムにも²⁹、そしてその後の様々な哲学の中にも現れる。その意味でリードの常識哲学は、決して歴史から消えていたわけではない。

註

1. とはいえ、どの哲学者が「常識学派 (common sense school)」に分類されるのかという問題には不明瞭な点が残る。通常は、イングランドにおいてジョセフ・プリーストリがリード、ビーティ、オズワルドの三人を一括して「常識哲学者」として紹介したこともあり、この三人が「常識学派」の代表者と呼ばれることが多い。また、リードの弟子にあたるデュガルド・スチュワート、トマス・ブラウン、ウィリアム・ハミルトンらも常識学派に含まれることがある。しかしグレイヴやレドウィックによれば、リード、ビーティ、スチュワートの三人は常識学派に含まれるものの、オズワルドはリードとは独立に考察をしていたため、トマス・ブラウンはリードを公然と批判したため、ハミルトンは結果としてリードから離れてカント的な哲学に近接したため、それぞれ常識学派から外れるとみなされる。(Ledwig (2007) p. 9.) 本稿では、基本的にはブラウンやハミルトンも「常識学派」として扱う。
2. Cuneo and Van Woudenberg (2004) p. 1.
3. Cuneo and Van Woudenberg (2004) p. 1
4. Reid (1764) p. ix. [邦訳: x 頁] なお Reid (1764) からの引用の訳文は、基本的に朝広訳 (2004) に従っているものの、表記の統一等の都合上、部分的に訳語等を変更している。
5. Reid (1764) p. x. [邦訳: xi 頁]
6. Reid (1764) p. 11. [邦訳: 11-12 頁]
7. Reid (1764) p. 32. [邦訳: 31 頁]
8. Reid (1785) p. 109.
9. Reid (1764) p. 13. [邦訳: 13 頁]
10. Reid (1785) p. 578, 583, 587.
11. Reid (1764) p. 288. [邦訳: 255 頁]
12. Macintyre (2003) p. 254.
13. Graham (2015) pp. 6-7.
14. Dixon (2010) p. i.
15. Mackintosh (1834) p. 298.
16. Dixon (2015) p. 37.
17. Hamilton (1853) p. 12.
18. Broadie (2009) p. 291.
19. Hamilton (1859-60) p. 16.
20. たとえばビーンブロッサムは、ハミルトンの思想がリードとは異なっていた点について、次のように述べている。「ハミルトンとリードの顕著な相違は、彼が編集したリード著作集の脚注と、リードの著作集の末尾に付した注釈に見られる。ハミルトンは、

一方ではリードの常識哲学を擁護し、他方ではカント的な哲学の新たな発見の洞察を利用する、というジレンマに陥った。(Beanblossom (1983) p. xi)」

21. Keefe (2012) p. 1.
22. Ferrier (1847) p. 239.
23. Ferrier (1854) pp. 48-9.
24. Keefe (2015) p. 70.
25. Ferrier (1847) p. 262.
26. Guyer (2015) p. 118.
27. Sorley (2012) p. 243.
28. Ledwig (2007)
29. Lemos (2004)

参考文献

- Beanblossom, Ronald E. (1983) "Introduction" in *Thomas Reid: Inquiry and Essays*. Hackett Publishing.
- Broadie, Alexander (2009) *A History of Scottish Philosophy*. Edinburgh University Press.
- Cuneo, Terence and Van Woudenberg, Rene (2004) "Introduction" in *Cambridge Companion to Thomas Reid*. Cambridge University Press.
- Davie, George (2001) *The Scottish metaphysics: a century of Enlightenment in Scotland*. Routledge
- Dixon, Thomas (2010) "Introduction" in *Thomas Brown: Selected Philosophical Writings*. Imprint-Academic.
- (2015) "Revolting against Reid" in *Scottish Philosophy in the Nineteenth and Twentieth Centuries*. Oxford University Press.
- Ferrier, J. F. (1847) "Reid and the Philosophy of Common Sense" in *Blackwood's Edinburgh Magazine*, vol. 62.
- (1854 [1856]) *Institutes of Metaphysics: the theory of Knowing and Being*. 2nd edition. William Blackwood and Son.
- Graham, Gordon (2015) "Scottish Philosophy after the Enlightenment" in *Scottish Philosophy in the Nineteenth and Twentieth Centuries*. Oxford University Press.
- Guyer, Paul (2015) "The Scottish Reception of Kant: Common Sense and Idealism" in *Scottish Philosophy in the Nineteenth and Twentieth Centuries*, Oxford University

- Press.
- Hamilton, William (1853) *Discussions on Philosophy and Literature, Education, and University Reform* (2nd ed.) in *Works of William Hamilton vol. 1*. Thoemmes Press.
- (1859-60) *Lectures on Metaphysics and Logic*. in *Works of William Hamilton* vol. 3-6. Thoemmes Press.
- Keefe, Jenifer (2012) “Introduction” in *James Frederick Ferrier: Selected Writings*. Imprint-Academic.
- (2015) “James Frederick Ferrier: Return of Idealism and the Rejection of Common Sense” in *Scottish Philosophy in the Nineteenth and Twentieth Centuries*, Oxford University Press.
- Ledwig, Marion (2007) *Common Sense: Its History, Methods, and Applicability*, Peter Lang.
- Lemos, Noah (2004) *Common Sense: A Contemporary Defense*, Cambridge University Press.
- Macintyre, Gordon (2003) *Dugald Stewart: The Pride and Ornament of Scotland*. Sussex Academic Press.
- Mackintosh, James (1834) *Dissertation on the Progress of Ethical Philosophy*. Adam and Charles Black.
- Redekop, Benjamin W. (2004) “Reid’s Influence in Britain, Germany, France, and America” in *Cambridge Companion to Thomas Reid*. Cambridge University Press.
- Reid, Thomas (1764) *An Inquiry into the Human Mind on the Principles of Common Sense*. Thacker Spink and Co. [トマス・リード (朝広謙次郎訳) 『心の哲学』知泉書館, 2004年]
- (1785) *Essays on the Intellectual Powers of Man*. John Bell and G. G. J. & J. Robinson.
- Sorley, W. R. (1921) *A History of British Philosophy to 1900*. Cambridge University Press.